

大学における日本語・日本文学教育の役割

徳 永 光 展

高等学校までの国語教育の発展として、大学における教養教育に日本語や日本文学という専門分野はどのような貢献を成し得るだろうか。

日本語による情報の摂取と発信が滞りなく行える技能を身に付けることは、専門分野を問わず必須であろう。その自覚に立った際、社会人として求められる言語活動に資する内容を大学教育がどのように提供できるかが問われる。

昨今、大学の教室には留学生の姿も多く目にする状況になっており、日本人と留学生の混成クラスでどのようにすれば受講生の期待に応じられるかが求められる時代を迎えた。日本人向けの国語教育と留学生向け日本語教育を統合した言語文化に関する教育の可能性が追求されるようになってきているのである。その過程で、講義形式以外の授業形態も模索され、知識の習得度を異にする学生がいずれも達成感を味わえるような心配りや配慮も授業者側は念頭に置く必要に迫られる。学生が授業時間内で能動的に活動するアクティブ・ラーニング形式の教育方法導入により、学生同士が絆を深め、学び合える場を意識的に作り出すことも試みられるようになって久

しい。

日本語を冠する科目では、表現活動に重点を置いた授業を設計し、受講生がそれぞれのペースで理解を深めていけるように導くことが可能である。少人数でグループを構成させ、話題を提供して話し合わせるところから始まり、人間関係を構築していく上での留意点に学生を導いていく。雑談のような語りから始め、続いて問いを発して答えを話し合わせ、その結果を発表させるような場を敢えて作り出すことで、仲間意識を学生に持たせ、彼らが共に学び合っていけるようにするのである。その上で、論題を与えてディベートやプレゼンテーションをさせたり、専門科目で取り組んでいる研究内容を専門外の学生に通じるように話させ、自分が興味を持って取り組んでいる活動を誰にでも理解可能な言葉で表現することにも挑戦させていく可能性も模索されている。

大学ではレポートの提出が求められる機会も多いが、何をどのように書けばよいのかといった論述文作成の手順を系統的に学んだ機会を持つている学生は数少ない。どうすれば論文に発展していけるレポートを執筆できるのかが分からないまま放置される可能性もあ

るため、意識的に文章の書き方に関する手順を示し、その方法で文章を執筆させる機会も設けられるとよい。できあがった文章は、学生同士で読み合わせを行うようにし、建設的なコメントを言い合つて相互評価させるようにすると、学生目線でお互いに何を加えればよりよい文章へと発展させられるかを考えられるようになっていく。

就職活動を控えた上級生は、自己紹介や志望動機を執筆したり、面接の場面で口頭発表したりする必要に迫られている。自らが何者であるか、学生時代にどのような活動に取り組んできたか、またどうしてその企業への入社を望んでいるのかを人事担当者に分かってもらえるような語りを準備していかなければならない。その際には専門分野における学びや卒業研究で取り組んでいるテーマについて、専門外の方々にいかにして通じる言葉で話しかけていくかが試されるのである。研究内容は専門的に深めていくべきだが、それを分かってもらう努力は日本語の授業で扱うこともできる。

社会人としての活動を控えた学生には、取り急ぎ迫っている就職活動への足掛かりに加えて、自らの人生設計をさせ、その結果を書いたり、話させたりする取り組みも大切である。いつ、どこで、何をしていたかを自覚できている学生は決して多くはない。悩みの渦中にある者も少なくない。そこで、今後のキャリアを展望させ、問題意識を共有させるよう話し合わせ、その結果を記録させると、それがそのまま就職対策につながっていくのである。

自分の人生を発見することは決して易しくはなく、時の訪れを辛抱強く待つ姿勢も必要になってくる。その際にひとつの手がかりを提供してくれる媒体を日本語で執筆された文学作品に求めていく

と、語学と文学を橋渡しするような視点を提供できる可能性が開けてくる。作品中でなぜそのような表現が採られているか、単に文章を読解するだけでなく、その作品を生み出した作家がどのような生涯を送り、人生のどの時点でどのような問題にぶつかりながら作家活動を展開していたのかという点にまで考察を進めれば、作中人物や情景描写に託した事柄に関する想像力を培っていけるのである。ただ作品を与えるだけにとどまらず、作家の実人生に関する知識を授けることで、作家の人生と彼らが紡ぎ出す表現には強い相関がある事実へと受講生の考察が深まっていく。

日本に留学しているのだから、日本語で書かれた小説に接してみたいと考える留学生もいる。だが、口語体で書かれた作品であっても、背景知識に乏しい日本語習者には理解に支障が生じもする。そこで、敢えて多くの翻訳が世界各地で出版されている作品を取り上げ、日本人学生には英訳を、留学生にはその学生の母語訳を提示すれば、授業は異文化理解を促す内容に発展する。日本独特の文化的背景を持った語彙や表現は外国語で言い表せるのか、翻訳者は一体どのような努力を強いられているのかという点に注目させると文学の授業は比較言語文化的な内容をも包括するようになる。原文と訳文を同時に読ませると、両者の間にずれが生じている状況を広く発見できるからである。しかしながら、この活動は誤訳の発見が目的ではない。どうして表現にずれが生じるのか、日本語原文で表現されている事柄がなぜある言語では翻訳できているのに別の言語では翻訳できず、翻訳者が注釈を付けているのかといった様子を説明させていけば、日本人学生には日本文化をグローバルな視点から捉える機会を与えるはずであるし、留学生には上級を超える日本語の

授業を提供することにつながっていく。

有名な作家でも名前しか知らないケースは多い。文学的な才能に恵まれた者が順調な作家人生を歩んだと思いついでいる場合があっても不思議ではない。けれども、最初から文筆を目指し、その道一筋で人生を全うできた者はかりではなく、様々な人生遍歴を経て、紆余曲折も体験し、その上で表現せずにはいられなくなった結果として著作に向かった作家もあるはずである。だから、傍から見れば順調に見える人生であっても、本人には激しい挫折体験や絶望の経験が潜んでいる可能性もある状況への想像力を巡らせる姿勢を培う活動は必要である。作家の人生を俯瞰する営みと、作品の発表状況を精査する視点を組み合わせれば、その時に記述されている表現が生まれた必然性にも気づいていけるであろう。また、人生には如何ともし難い失敗が誰の人生にも潜んでいること、であれば現在、学生が夢想している人生設計にも落とし穴があるかもしれないこと、その自覚に立った上で、浮き沈みも受け入れながら、更なる高みを目指して努めていく価値を知ることの重要性にも思いを馳せられるであろう。

人の心は化学反応式のようにはっきりと解答が出る類のものではない。説明ができない現象の存在に気づき、そのような心を持った人と人がぶつかり合う中で予測不可能な人生を手探りで進んでいかざるを得ないのが常である事実の自覚は生きていく上で大切な教養の一部である。そのような認識に立脚した際に、専門分野を問わず、言語表現を深く捉える機会を与える存在として、教養教育を担う日本語・日本文学の研究者の存在価値が求められる事実気づくのである。

大学教育も絶え間ない革新の中、実学を重視する傾向へと傾きつつあるように見える昨今ではあるが、教養の根幹をなす母語や母語で執筆された文学（日本人の場合は日本語）への造詣は時代を超えて継承させていくことが望まれる。また、留学生には日本事情を扱う際の教材として日本文学を取り上げ、作品に触れさせる機会を設ける意義も強調されるべきであろう。同時に、様々な文化的背景を持った学生が集う教室で、言葉を通して絆を深めていける事実を発見させるように受講生を導いていく態度が指導者の側には求められるはずなのである。

（とくなが・みつひろ）